囚われのドラゴン

綿峰一斎

数百年の平和を破り、突如挙兵した魔導国家バラウール。瞬く間に三つもの国が蹂躙され、脅威は我が国にも近づきつつあった。バラウールの尖兵は不死身という噂の真相を探るため斥候が何人も送り込まれ、ただ一人戻った者が持ち帰った情報……それは、不死の力は捕らえられた竜の魔力に依るものであり、この竜が生きている限り、バラウールの兵から生命が失われることはないというものだった。

我が国随一の魔導士であるあなたの使命は件の竜を殺すなり開放するなりして、バラウールの軍団を無力化することだ。慌ただしく国が防備を固める中、あなたは旅人に身をやつして出立し、竜が捕縛されているという廃城へと向かった……

1

てっきり厳重な警備が敷かれているかと思っていたが、廃城はもぬけの殻で、あっさりと侵入することができた。目立つことを避けているのか、それとも何か信頼のおける護りでもあるのだろうか……？

斥候の情報通り、程なく地下へと続く落とし戸が見つかる。この先に竜がいるのだろう……だが、バラウールは強力な魔導国家だ。あなたが竜に近づきつつあることは既に知られているに違いない。急ぐ必要がある。13へ。

2

「解放だと……我を捕らえし人間が、今更どういう吹き回しだ？」

失われて久しい竜の眼が光を帯びたような、そんな気がした……

同じ人間だが、バラウールとは敵対しているが故に、お前を解き放つのだと言うのなら12へ。

このような自然に反する所業が許されるとは思っていないと告げるのなら3へ。

3

竜は笑ったようだった。骨の間を抜けてきたその吐息は、腐れた肉が放つ毒の瘴気となって流れてきた。肌がチリチリとする。

「我にすら破れ得ぬこの呪われし生をどうにかできるなど、思い上がりよる……」

しかし、竜は笑うのをやめた。「だが、それも一興か。やってみるがいい」

竜の心臓を破壊するつもりなら15へ。
竜の頭を切り離すつもりなら4へ。
床の魔法陣を調べてみるなら10へ。

4

大方の肉が腐れ落ち、太い骨がむき出しになっている竜の首を調べたが、これを切断するのは中々骨が折れそうだ。だがやらねばならない。あなたは苦心して仕事に取り組んだが、結局成し遂げることはできなかった。

竜があくびをするかのように口を開く。

「……我に僅かでも無益な希望を抱かせた報いを受けるがいい」

その言葉はガスのブレスを伴っていた。その猛毒を浴びたあなたは、あっという間に死んでしまう……

5

二本目の牙に手をかけたその時、竜の声が響いた。「一つは許した……だが、それ以上は許さぬ。これ以上人間に奪われてなるものか！」

それは口蓋の中にいたあなたに襲い掛かる……猛毒のブレスとなって。次の瞬間、あなたは何も言わぬ躯となって崩れ落ちる。逃れるすべはない。

6

爛れ腐った体躯において、ただ心臓だけが生気を保っていた……その心臓が破れた瞬間、中に溜まっていた血が溢れ出す。毒竜の血潮もまた猛毒であった。どろりとした竜の体液を全身に浴びたあなたの命は、瞬く間に失われてしまった……

7

竜牙兵を飲み込んだ血は、そのまま真下へと落ちていく……竜を縛る魔法陣の中心へと。床の組石そのものが溶けて拉げ、魔法陣は崩壊した。竜は歓喜の咆哮を挙げて身を震わす。

あっという間に地下の玄室が毒のブレスで満たされる。あなたが一命をとりとめたのは、竜が天井を突き破って地上へと這い上がったからだった。流れ込んだ風が、あなたを窒息の運命から救いあげたのだ。しかし救われたのはあなただけではなかった……物語が終わりを迎える時。パラグラフ番号から10を引いたパラグラフへ進むことを忘れるな。今は18へ。

8

……しかし、そうはならなかった。心臓を失った竜はバラウールの残骸の上に墜ちていく。竜とバラウールの結びつきは未だ健在だった。両者は運命を共にした……このまま朽ちて混ざりあい、自然に還っていくのだ。

9

この広間に満ちている魔力を使い、あなたは見事に竜牙兵を召喚することに成功していた。しかし、竜牙兵の力をもってしても、竜の首を斬り離すことは叶わなかったのだ。

残念ながら、あなたの運命は何一つ変わらなかった……玄室に充満した毒ガスから逃れるすべはなかった。

10

「ほう、魔術の心得があるのか？」

魔法陣を調べ始めたあなたを見て、竜が呟く。「……魔導士なれば、我が牙を取ることを許す。見事使いこなしてみよ」

竜の牙を蒔くことで召喚できる完全武装の骸骨兵士、竜牙兵のことは魔導書で読んだことがあった。だが竜の牙などそうそう手に入る品ではない。実際に試してみたことは無かったが……この部屋には魔力が満ちている。もしかしたら、あなたにも竜牙兵が創れるかもしれない。

竜の言う通り、その牙を取るなら17へ。

そうしないのなら、次の行動を決めなければならない。魔法陣を調べ続けるのなら16へ。竜の心臓を破壊するつもりなら15へ。竜の頭を切り離すつもりなら4へ。それぞれ進め。

11

流石は国随一の魔導士だ。あなたは竜牙兵を召喚することに成功していた。あなたの代わりに、溢れてきた死の血潮を浴びた竜牙兵は崩れていく……だが、心臓を傷つけることはできた！ 7へ進め。

12

「我を利用しようと？ 愚かな人間が……！」

竜が吠えた。その咆哮はガスのブレスとなって襲い来る。あっという間に地下は猛毒で満たされてしまう。あなたになすすべはない……

13

地下へと続く螺旋階段を下りていく。積もった埃は、長い間誰もここに立ち入っていないことを物語っている。次第に強くなる腐臭が鼻を衝く。突き当りにあった扉に施された封印を解除して中に入ると、その正体が分かった。地下の玄室には、予想通り囚われの竜がいたのだが……何本もの杭で魔法陣が描かれた床に打ち付けられたその身体は既に腐り落ちている。明らかに、無理やり魔力で生かされているのだ。その証拠に、半ば骨と化した頭がわずかに傾ぐ。こっちを見ていると思しき眼窩は空虚だったが、竜は言葉を発した。

「矮小な人間が我に何用だ……？」

お前を殺しに来たと答えるのであれば3へ。
お前を開放するつもりだと返すのなら2へ。
バラウールに恨みを晴らしたいかと問うのなら12へ。

14

噂でしか知らなかった竜の牙が、あなたの手の中にある。魔導士としての直感があなたに告げる……これを触媒にすれば、きっと竜牙兵を生み出すことができるだろう。

今後、あなたが力及ばず死んでしまった場合、あらかじめ「召喚していた竜牙兵」を身代わりにすることで、窮地を逃れようと試みることができる。魔道の加護を得ようとするときには、その時点のパラグラフ番号に5を加えたパラグラフへ進むといい。だが、それは今ではない。今は次の行動を決めなければならない。

竜の心臓を破壊するつもりなら15へ。
竜の頭を切り離すつもりなら4へ。
魔法陣を調べ続けるのなら16へ。

15

あなたは竜の脇腹に大きな穴が開いているのに気づく。腐食が進んだ竜の身体の中は既に空虚であり、垣間見える臓腑の残骸の中に、ただ一つ、今だ力強く脈打つ心臓があるのが分かった。

これを破壊するべく武器をふるうのなら6へ。
やはり竜の頭を切り離すことにするのなら4へ。

16

魔法陣には三重の六芒星が描かれており、その六つの角ではルーン文字が彫られた巨大な石の杭が竜の身体を穿っている。床に縫い付けられた竜の心臓がその中心に位置しているようだ。腐れて朽ち逝く竜の心臓に、バラウールの秘儀によって生命が流し込まれ続けているのだ。つまり、心臓か魔法陣そのものを破壊すれば、その流れを断ち切ることができるのではないだろうか……

心臓を破壊するのなら6へ。
魔法陣を破壊するのなら18へ。

17

今、竜がその咢を閉じたら一巻の終わりだ……そんなことを考えながら、あなたは牙を一本抜きとった。萎びた肉塊となった舌がわずかに蠢く。

もう一本抜くのなら5へ。ここでやめておくなら14へ。

18

竜を縛る魔法陣。抑えつけられた竜にはどうすることもできまいが、外からならその軛を外すことは可能だった。

魔法陣に起きた異変を察知して現れたと思しきバラウールの魔導士たちが、怒れる竜の爪によって紙切れのように引き裂かれる姿を尻目に、あなたは崩壊する廃城から辛うじて逃げ出すことができた。

竜は空っぽの眼窩であなたを一瞥すると、残された力を振り絞って空へと舞い上がった。その恨みがバラウールを焦土と化すのにそう時間はかからなかった。

バラウールは滅んだ。しかし積もり積もった竜の怒りは収まらず、人間という種族そのものに向けられていた。根絶やしにせずして死ねようか……最後に見たあの眼差しが、そう物語っていた。我が国が焼かれるのも時間の問題だ……怒りで迫る死を退け続ける竜の怨念を止める術はもうないのだ……